訳者解説
十二世紀変革論の現在

小澤 実

はじめに

本書『十二世紀宗教改革』は、著者ジャイルズ・コンスタブル教授の長年にわたる修道制・修道院研究の総決算である。監訳者序文で示されているように、尊者ペトルスの書簡編集と初期中世の修道院十分の一税に関するモノグラフを上梓した著者は、中世修道院研究の俊英として多数の論文を執筆し、ハーヴァード大学歴史学部教授、ダンバートン・オークス研究所所長、そしてプリンストン高等研究所教授という、アメリカ合衆国において考えうるかぎり最高のアカデミックポストを歴任した中世史家である。コンスタブル教授は本書、そして本書と双子の関係にある『西洋中世の宗教思想』という、いずれも原書で四〇〇頁を超える大著によって西洋中世の宗教世界をその底部よりえぐり出すことに成功した。イギリスのデイヴィッド・ノウルズ、ドイツのカッシウス・ハリンガー、フランスのジャン・ルクレールという現在の修道院研究の基礎を作り上げた三人の碩学の成果を下敷きとしながら、十二世紀という短い時間幅のなかで多様な側面をとりあげ変化の重層性を描き出した本書は「水平的なレベル」で、三つの宗教社会テーマを古代末期からルネサンスまでという一〇〇〇年にわたる時間幅

で考察した『西洋中世の宗教思想』は「垂直的なレベル」で、西洋中世の宗教社会を腑分けする。[*1] アメリカの中世史学には珍しいもの静かと言ってもよい筆致ながら、証拠と引用される膨大な具体的事例がコンスタブル教授の論証に異議を差し挟むことを困難にする。

本稿ではそのような本書を、十二世紀をめぐる近年の研究史のなかに位置づけることによって、『十二世紀宗教改革』の持つ学術的意義と射程を明らかにしたい。以下では、1 十二世紀変革論の誕生、2 「十二世紀のルネサンスと刷新」会議、3 『十二世紀宗教改革』の持つ意義、4 近年の動向を以下に述べておきたい。

1 十二世紀変革論の誕生

十二世紀という一世紀に特別の意味を与えたのは、言うまでもなくアメリカの中世史家チャールズ・ホーマ・ハスキンズである。まさにコンスタブル教授の先任者としてハーヴァード大学で中世史講座の教授を務めたハスキンズは、一九二七年に、写本研究や中世文化に関わる個別テーマの総決算として、『十二世紀ルネサンス』を上梓した。[*2] 今では日本の高校世界史の教科書においても一つの歴史タームとして採用された「十二世紀ルネサンス」であるが、本書が登場したときは、多くの歴史家から驚きをもって迎えられ、「中世史家の反乱」(the revolt of the medievalists) という言葉すら生まれたことはよく知られている。[*3]

「中世史家の反乱」という物言いをつけたのは、イタリア・ルネサンスの専門家たちである。ハスキンズ登場以前のヨーロッパ史叙述において、イタリア・ルネサンスは特別な時代であった。スイスの文化史家ヤーコプ・ブルクハルトが著した『イタリア・ルネサンスの文化』が切り取った十四世紀後半から十六世紀前半という二世紀は、古典が復興し、芸術が興隆し、都市が繁栄し、そしてあまつさえ自我を持つ個人が立ち現れるという、近

代世界のはじまりを告げる輝かしい画期として、その前後の時代を截然と分かつ歴史的時期という役割が割り当てられたのである。[*4] 中世の基本構成要素であるゲルマン人や教会制度の存在は、とりわけプロテスタント勝利史観においては、偉大なるローマ世界を終焉に追い込んだ歴史における否定的要素として扱われ、その結果として、中世世界もまた、ルネサンスによって塗り替えられるべき「暗黒の中世」として、人々の意識の中にすり込まれることになる。そういった意味において、『十二世紀ルネサンス』は、ルネサンス史観を打ち砕く「中世史家の反乱」の旗頭としての役割を果たした、と考えられてきたのである。[*5]

ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』は、大きく分けて十二世紀における古典復興の二つの局面を説明している。一つはヨーロッパ大陸各地の書庫に眠っていたラテン語写本を再度日の当たる場所に持ち出す作業である。つまり第四章「ラテン古典の復興」、第五章「ラテン語」、第六章「ラテン詩」、第七章「法学の復興」、第八章「歴史記述」がその局面にあたる。もう一つは、従来のヨーロッパでは入手ができなかったアリストテレスら古典古代の知的財産をギリシャ語やアラビア語からラテン語へと翻訳する作業である。第九章「ギリシア語・アラビア語からの翻訳者たち」、第十章「科学の復興」、第十一章「哲学の復興」がそうである。この二つの古典復興が相乗して、第十二章「大学の誕生」へとつながる。ヨーロッパ内にあったラテン語文献の蓄積の再発見とヨーロッパ外での蓄積のラテン語への翻訳という二段構えのルートを通じて、十二世紀ルネサンスは生起したと言える。写本研究に基づく中世科学史ならびに文化史の個別研究を積み重ねたハスキンズの面目躍如たる総合である。

ハスキンズの著作がもたらした学術界の反応とそこからの展開は、ウォレス・K・ファーガソンの著作や創文社版訳書の野口洋二による訳者後書きに手際よくまとめられている。[*6] たとえば、後者は本書に端を発する問題系を五つにまとめる。つまり、①十二世紀の文化発展は「ルネサンス」と呼びうるものであったかどうかという問題、②ハスキンズの文化理解がラテン語著作それも非宗教的作品に限定されている問題、③十二世紀の文化復興

に及ぼした内的要因と外的要因に対する評価の問題（これは先の段落での指摘に通じる）、④ハスキンズが重視した北フランスと北イタリア以外の地域における文化復興の問題、⑤十二世紀ルネサンス運動が生起した時間幅の問題である。いずれの論点もそれぞれのありかたで一九二七年以来検討が積み重ねられているが、本稿では『十二世紀宗教改革』と関わる範囲において議論を重ねたい。

2　「十二世紀のルネサンスと刷新」会議

一九七七年十一月二十六日から二十九日にかけて、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーヴァード大学で、「十二世紀のルネサンスと刷新」と題された学術会議が開催された。ハスキンズが教授職を長年勤めた記念の地で開催されたこの会議は、『十二世紀ルネサンス』刊行五十周年を記念しての試みであった。アメリカのみならずヨーロッパからも最高の中世学者が招聘され、会議前に事前に配布された原稿をめぐって交わされた議論をもとに、一九八二年、『十二世紀のルネサンスと刷新』というタイトルの論文集が編まれた。その編者となったのが、カリフォルニア大学バークリ校のロバート・L・ベンソンと当時ハーヴァード大学に籍を置いていたジャイルズ・コンスタブルであった。[*7]

本論集の目的は六点に要約されている。すなわち、①十二世紀ルネサンスを定義する際に依拠する特徴、②古典主義の問題、③十二世紀ルネサンスの史料源泉、④十二世紀ルネサンスにおける宗教的要素、⑤社会、経済、制度的条件、⑥年代的ならびに地域的枠組み、である。このような目的意識のもと、本論集は全体を以下のように分割している。第一部「宗教」、第二部「教育」、第三部「社会と個人」、第四部「法、政治、歴史」、第五部「哲学と科学」、第六部「文学」、第七部「芸術」である。すでに述べたように、ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』は、「ヨーロッパ内にあったラテン語文献の蓄積の再発見」と「ヨーロッパ外での蓄積のラテン語への翻訳」という二つのルネサンスの複合であったことを思い起こせば、第四部「法、政治、歴史」、第五部「哲学と科学」、第六部「文学」がハスキンズの提起したテーマのアップ・トゥ・デートな再検討となっている。もちろん一九二七年と同一テーマの枠をそのまま保持しているわけではなく、いずれの箇所においても寄稿者の関心は拡張している。たとえば、第四部「法、政治、歴史」のうち、ステフェン・クットナー「法学の復興」とペーター・クラッセン「事績録、普遍史、終末論。過去と将来のビジョン」は、それぞれハスキンズの著作の第七章と第八章の再検討となるが、クヌート・ヴォルフガング・ネル「新しい法学の制度的基礎」ならびにロバート・L・ベンソン「政治的革新」は、『十二世紀ルネサンス』の第四節と関わりがあるものの、ハスキンズが十分に論じることのなかった側面である。第五部においても　哲学思想内にいくつかの潮流のあることが簡潔に整理され、第六部「文学」では、「ヨーロッパ内にあったラテン語文献の蓄積の再発見」とならび重要な十二世紀の側面である俗語文献の隆盛について論じている。

しかし、本論集の持つより重要な学術的意義は、『十二世紀ルネサンス』で論じることのできなかったテーマを設定して十二世紀という創造的な時代像を刷新したことにある。第一部「宗教」、第二部「教育」、第三部「社会と個人」、第七部「芸術」がそうであり、とりわけ私たちは、第一部「宗教」という項目が立てられたことの重要性に気づかねばならない。これはもちろん編者にしてハスキンズのポスト継承者であるコンスタブル教授の専門を立てたてのことでもあろうが、しかし数あるテーマのなかでまず宗教という項目を立てるところに、当該会議を組織した両編者は、このテーマこそが、『十二世紀ルネサンス』で論じられていない問題系のなかで最も重要なテーマであるとの確信があったからであろうことが容易に推測される。

戦後のある時期に至るまで、中世宗教史研究の中心は英米圏ではなく、大陸それもイタリアやフランスのよう

なカトリック研究の伝統のある言語圏やキリスト教学ならびに精神史の蓄積のあるドイツ語圏であったように思われる。一九三五年以降の大まかな流れは別稿で整理しておいたが、こうした潮流のなかにアメリカは棹さすことはなかった。[*8] 十九世紀から二十世紀初頭にかけて異端審問研究で不朽の業績を上げたヘンリ・チャールズ・リーという例外的存在を除けば、アメリカにおける中世史研究のなかで宗教史が占める割合はほとんどなかったと言ってよい。[*9] 変化が生まれるのは戦後である。たしかに、ハスキンズがノルマンディをテーマとして開拓した研究分野の一つであり、彼の弟子の一人であるジョセフ・ストレイヤーを旗頭とした中世行政史研究が、戦後アメリカ中世史学のなかでまばゆい光を放っていたことは否定できない。[*10] しかし、宗教学シカゴ学派のなかから出てきたバーナード・マッギン、そしてヨーロッパ留学を経て尊者ペトルスの書簡編纂という成果を上げたジャイルズ・コンスタブルのように、アメリカの文脈のなかで教育を受けた世代が、ヨーロッパの研究遺産を継承しつつ、かつ自らもその潮流に棹さす一人となって独自の中世宗教研究を展開するようになったのである。

3 『十二世紀宗教改革』の持つ意義

このように、一九七七年の時点で、十二世紀ルネサンスという知的潮流の理解をハスキンズが想定したものよりも遙かに重層的なものへと拡大し、その中に宗教研究の重要性を付け加えることを忘れなかったコンスタブル教授は、その後、十二世紀に関わる個別研究を次々と刊行した。そしてハーヴァード大学からプリンストン高等研究所にポストを移す、コンスタブル教授の個人経歴にとっても記念すべき一九八五年に、ケンブリッジ大学のクレア・ホールで開催されるトレヴェリアン記念連続講演に招聘されて全体の構想を練り上げたのが、『十二世紀宗教改革』の前身である。コンスタブル教授は一九五二年から翌年にかけてケンブリッジ大学に学生として留学している。それは彼の学問的師の一人であるデイヴィッド・ノウルズがケンブリッジ大学の近代史欽定講座教授に就任した年であり、コンスタブル教授が生涯その研究の伴侶とする尊者ペトルスの書簡校訂をすすめられた年でもある。[*11] 一九八五年に構想を素描して一冊の書物に結実するまでに、およそ十年の歳月が経過している。巻末の研究文献目録からも明らかなように、コンスタブル教授は、一九八五年までの研究だけではなく、本書の刊行直前までにでた作品群を消化している。

ここで『十二世紀宗教改革』の持つ学術的意義を確認しておきたい。『十二世紀のルネサンスと革新』の刊行以来、十二世紀のあらゆる側面について、その時代の持つ特有性が議論されている。日本においても、たとえば、堀米庸三・木村尚三郎編『西欧精神の探究――革新の十二世紀』は、今読み返してもなお清新の筆遣いを感じるほどに豊かな時代性を十二世紀のなかに読んでいるし、[*12] 次世代で宗教史に限ったとしても、池上俊一、杉崎泰一郎、甚野尚志、小田内隆らが、十二世紀に生起する宗教運動や宗教者の思想に関わる諸問題を論じている。[*13] こうした戦後世代の十二世紀宗教論の特徴は、当該時期に出てきた、ロンバルディア地方のパタリアや南フランスのヴァルド派といった異端的運動の出現、ユダヤ人に対する態度の硬化、十字軍によるイスラームとの関係の先鋭化、シトー会による開墾、従来の教会制度や修道院制度から離れた位置にいる隠修士活動や民衆信仰の活性化、都市社会の勃興、商業ネットワークの緊密化、大聖堂の建立といった、まさに中世ヨーロッパ世界を彩るさまざまな要素の現出を前提としている。『十二世紀宗教改革』で論じられる世界の背景に、そうしたエネルギーに満ちた社会があったことは否定できない。

しかし、中世史学で一般的に理解される創造的な時代を想定していた読者にとって、『十二世紀宗教改革』は、やや驚くべき内容であるかもしれない。というのも、本書のなかで取り上げられる事例の多くは、クレルヴォーのベルナールらシトー会士の事例を除けば、どちらかといえば一般的な十二世紀論では引かれることのない「黒

い修道士」、つまりベネディクト会のそれだからである。修道院思想という局面に焦点を当てたとしても、多くの研究者の関心を惹く、いわゆるシャルトル学派などとの関係についても特段の頁を割いているわけではないし、十字軍説教を論じるわけでもないし、十二世紀ルネサンスの一方の核となったはずの知的文献の翻訳活動についてもそれほど触れているわけではない。

しかしながら我々は、ここでコンスタブル教授が本書のタイトルにあえて用いた「宗教改革」という言葉の重みを想起しなければならない。「宗教改革」とはかつて、十六世紀初頭におけるローマ・カトリックの「腐敗」に対して異論や批判を唱えるプロテスタント思想家とそれに同調する人々によるキリスト教内の新宗派確立の動きを指していた。こうしたプロテスタント諸勢力の登場により、キリスト教は救われ、ヨーロッパもまた初期近代世界へと移行したとする旧説は撤回されねばならない。プロテスタント諸派やそれを受け入れた諸国家が改革を進めていたのと同様に、同時期にカトリック側も改革を進めていたし、ギリシャ正教会でも本山のコンスタンティノープルがオスマン帝国の手に陥落するという大事件を受けて大きな変化を経験することになった。宗教改革にとってルターの登場が一つの契機となったことは確かであるが、改革運動は、それぞれのセクトのなかで進展していたのである。[*14]

本書の「十二世紀宗教改革」も、本質的にこうした近年の十六世紀宗教改革と同じ方向性を持つ。つまり、一般的に流布しているシトー会による刷新のみに焦点を当てるのではなく、いずれもその淵源をたどれば、修道生活の成立以来流布していたさまざまな規定をもとに六世紀にモンテ・カッシーノ修道院で成立した『ベネディクトゥス戒律』の読み直しへと辿り着く、「黒い修道士」たちの「内部からの」制度的また精神的改革をさして『十二世紀宗教改革』のメインテーマへと帰着するのである。いずれもこの『戒律』を生活の中心におきながらも、書簡による命令や慣習律といった明示的作法に加えてさまざまな暗示的作法で初期教会の「使徒的生活」

(vita apostolica) へ回帰しようとする修道精神のあり方を示している。従来の十二世紀宗教史においては、シトー会や異端と判断された諸派による「使徒的生活」に注目が集中していたが、それがキリスト教世界全体を覆うものであったことを明らかにしたのが本書で試みられた総合的叙述であった。

4　近年の動向

十六世紀のさまざまなセクトの宗教改革家たちが聖書原典をめぐって試みたのと同様に、『ベネディクトゥス戒律』という西欧修道理念とそれに基づく生活の根本に対する立ち返りに、「宗教改革」の姿を見るというのが本書の趣旨であった、と言えるかもしれない。それは「地味」であるがゆえに、ハスキンズ以来の中世史家によって等閑視されてきた側面である。しかしその『ベネディクトゥス戒律』は西洋中世の修道生活に関わる人びとにとって信仰生活の最も深いところに位置するテクストであるがゆえに、そこへの根本的な問い返しは、ベネディクト会それ自体の刷新を図るだけではなく、守るべき根本戒律は何かといった問いへと立ち返り、托鉢修道会や騎士修道会といったその後の新しいかたちの修道生活を準備する苗床となるはずである。

コンスタブル教授は本書で、「十二世紀宗教改革」を、その改革の前提となる十二世紀社会のなかに位置づける試みを行った。ただし、彼の試みの中心は、改革運動を在地社会へ位置づける試みである。それは改革運動が十二世紀社会にしっかり根づいていることの証明でもあるが、本節では、『十二世紀宗教改革』の記述をいったん離れ、若干の近年の十二世紀研究を振り返ることにより、本書が扱う十二世紀という時代が現在置かれている研究状況を振り返ってみたい。

「長い十二世紀」とグレゴリウス改革の位置づけ

まずは時期区分に関する問題である。十二世紀を変革の時代と見なし、その前後の時代と切り分ける時代観は、長らく命脈を辿ってきた。我が国で言えば、すでに述べた堀米・木村編『西欧精神の探求――革新の十二世紀』などがその代表であろう。本論集に代表されるように、たしかに十二世紀はそれ以前の十一世紀とそれ以降の十三世紀とも異なる色調を持った時代であったという見方である。ただし、その転換点の指標の一つとされていたのは、一〇九六年のクレルモン公会議に続く第一回十字軍と一二〇四年の第四回十字軍という政治的事件であった。また別の指標としてあげられるのは、ゲルト・テレンバハが主張するように、グレゴリウス改革の完成であった。[*15] 改革教皇らの尽力により、世俗権力が握っていた聖職叙任権を教会側に取り戻し、教皇と皇帝という聖俗二重構造が成立したのがまさに十二世紀であるという理解である。

しかしながら、近年の研究動向は、十二世紀のみを一つの時代と切り取る理解を後景に退かせているようにも見える。たとえば、十字軍史家のジョナサン・ライリ・スミスと思想史家のデイヴィッド・ラスカムの編纂する『新ケンブリッジ中世史』の第四巻は、「一〇二四年から一一九八年」を二冊で包摂する。この二冊は、十一世紀と十二世紀という、従来の理解であれば別個の世界として分割された時代を、連続する要素のある一つの時代として捉える試みである。つまり、グレゴリウス改革で十一世紀と十二世紀を分断するという旧来の見方をとることなく、紀元一〇〇〇年前後の修道院改革から十一世紀後半のグレゴリウス改革から十二世紀における教皇権の拡大と十字軍活動の活発化という流れを、一つのプロセスとして把握しようとの意識の表れでもある。[*16] クリュニー改革から出発した関口武彦による重厚な研究もこうした世界の流れに則ったものであると言える。[*17]

他方で「長い十二世紀」(long twelfth century) という言い方をタイトルに据える書物すら刊行されるようになった。一つは、ノートルダム大学で開催された研究集会の記録に基づく『ヨーロッパの変容――長い十二世紀』であり、

もう一つはジョン・D・コッツ『ヨーロッパの長い十二世紀』である。[*18] 研究者間に「長い十二世紀」がいつからいつまでを指すのか合意があるようには見えないが、いずれにせよ単純に政治的な枠組みだけではなく、複数の要素を考慮して、時代の変化を見ようとする方向への転身であるように思われる。少なくともこのような言い方が研究書の表紙を飾るようになったという事実自体が、十二世紀観に対する変化を物語っていると言って良いかもしれない。

十二世紀の「地理上の発見」

次に対象空間の問題である。コンスタブル教授は基本的にイングランドならびにカロリング帝国の後継国家でフランス・低地地方・ドイツ・イタリアの事例を扱っていた。しかしながら、ロバート・バートレットがその著書『ヨーロッパの形成』のなかで強調するように、十二世紀は従来のヨーロッパ世界が各方面に拡大する時代である。[*19] その根底には上昇局面に転じた人口、交易網の展開とそのハブとしての都市の成長、そして聖俗あらゆる階層における信仰に対する問い直しの動きがある。ここで私たちが注目するのは十字軍とノルマン人である。ジョセフ・ストレイヤーらが主張したように、十二世紀は、確かに後の近代国家に繋がる諸国家がその姿形を整えた時代であるが、[*20] それと同時に、「国境」を超える人の移動が加速する時代でもある。

近年、聖地奪回を目的とするいわゆる番号付き十字軍だけではなく、バルト海周辺の異教徒の改宗を目的とした北方十字軍ならびにイスラーム勢力からの領地回復と植民を目的としたレコンキスタもあわせて十字軍運動と捉える傾向がある。[*21] そのように見た場合、十字軍運動は、キリスト教徒がさまざまな面で優位を占めるキリスト教世界をただ中東だけではなく、バルト海沿岸とイベリア半島へも拡大させたことになる。[*22] 他方でノルマン人は、一〇六六年のアングロ・ノルマン王国の成立後、ブリテン諸島周縁部のスコットランド・アイルランド・ウェー

ルズという「ケルト辺境」へその支配権の拡大を図り[*23]、他方で一一三〇年には、シチリアと南イタリアを繋ぐノルマン・シチリア王国を成立させた[*24]。このように十字軍とノルマン人の活動は、キリスト教世界の拡張が最も進展する時代でもあった。

キリスト教世界の拡大は、その外部世界に対する関心も惹き起こした。ただし現実の地理的情報というよりもむしろ、キリスト教世界の外部に対する一種の「偏見」に基づく想像界である[*25]。よく知られた事例として、イスラーム教徒からキリスト教世界を救済すると期待された、東方世界に住まう司祭ヨハネスの書簡をあげることができる[*26]。他方でウンベルト・エーコによる小説『バウドリーノ』が描き出したように、古典文献に記述される怪異なるものがすまう世界として東方世界が描写され、一種の偏見に基づくヨーロッパ人の想像世界が鍛錬されたのもまさにこの時代であった[*27]。ジャック・ルゴフや池上俊一の研究が示す中世人の想像界の急速な醸成が、十一世紀でも十三世紀でもなく十二世紀であったという事実は強調しておきたい[*28]。

異端・ユダヤ・イスラームそしてユーラシア・キリスト教との接触

第三に「他者」の問題である。すでに述べたように、『十二世紀宗教改革』では、修道院・修道士内の問題に主眼を置いていた。修道世界の外部との関係を考慮していないわけではないが、世俗社会との関係が主であった。しかし、多くの論者が述べるように、十二世紀は「他者問題」が顕在化する時代でもある。それは、ローマ・カトリックの教えから逸脱した信仰者に対する異端というレッテルの貼り付け、ポグロムなどに帰結するユダヤ人に対する締め付け、同性愛者に対する否定、宗教上の罪とされた癩病罹患者に対する迫害である。教皇庁の制度的・イデオロギー的基盤が整い、その一方で、『十二世紀宗教改革』がいみじくも論じたように、『ベネディクトゥス戒律』に立ち返ることで宗教的純粋性が高まれば高まるほど、「正統」から逸脱したと見なされる集団に対する他者意識が先鋭化する現象が顕著になる。ドミニク・イオニャ・プラやロバート・ムーアが述べるように、「内なる敵」を再発見した十二世紀は、そのような「異物」に対する「迫害社会」としての側面が顕著になるという面も持ち合わせていた[*29]。

以上はヨーロッパ世界内部での「他者」との接触であるが、ヨーロッパ人がキリスト教の外部と捉えた集団との関係を捉え直す研究も爆発的に増えている。中世ユダヤ教に関わる研究としてアンナ・アブラフィアによる一連の研究に指を屈する[*30]。彼女は、ともすればユダヤ世界だけを切り取る従来型の研究とは一線を画し、十二世紀におけるユダヤ教の知的文脈を跡づけ、キリスト教世界との緊張をも包み隠すことなく、ヨーロッパ世界におけるその知的貢献を論じる。イスラームとヨーロッパの関係をめぐる研究は、リチャード・サザーンやモンゴメリ・ワットによる古典的記述以来、史料校訂や史料要録の整備も含めて行われている[*31]。加えて、近年では、系統の異なる諸言語を同時に駆使する研究成果も問われている。例として、西洋言語と中東言語双方の史料を踏まえノルマン・シチリア王国における両者の関係を扱う研究、イスラーム世界におけるキリスト教徒の事例を扱う研究、西洋世界におけるクルアーンの受容の議論などはヨーロッパ史とイスラーム史をつなぐ重要な貢献である[*32]。いずれにおいても十二世紀の動向について一定の筆が割かれている。

十二世紀ルネサンスにおける知識の移動

第四に十二世紀問題の原点に立ち戻ろう。つまり十二世紀ルネサンスの問題である。『十二世紀宗教改革』の刊行後、フランスで一冊の研究書が世に問われた。中世史家シルヴァン・グゲナムによる『モン・サン・ミシェルのアリストテレス』という著作である[*33]。著者は、アラビア語からの翻訳を通じてヨーロッパにアリストテレス思想が導入されたとする十二世紀ルネサンスの根本理解に対し、実のところ、ノルマンディのモン・サン・ミシ

エル修道院において、ヴェネツィアのヤコブスという人物がアリストテレスの著作の大部分をすでに翻訳していた可能性があるとのテーゼを提起した。仮にこれが事実だとするならば中世史上の大発見となるが、写本の伝承プロセスにかかわるグゲナム自身の議論の根拠が弱く、さらに、グゲナムのテーゼそれ自体の背景にフランス社会のなかで顕在化していたイスラーム嫌悪を助長する下地があるのではないかという疑いにより、歴史学の内外に波紋を呼ぶことになった。[*34]

ここでグゲナムのテーゼの当否は議論しない。しかしながら、グゲナムのテーゼをめぐる論争は、十二世紀の革新性の中心的テーゼであった十二世紀ルネサンスのありかたをめぐる重要な問題に立ち返らせる。すなわち古典古代の知識の伝承と翻訳の問題である。すでに述べたように、ハスキンズは十二世紀ルネサンスの本質を、古典古代の文献の復興と翻訳文献の導入という二段構えで整理した。ここでは後者の翻訳文献の問題に焦点を絞ろう。私たちは一般に、トレドや南イタリアなどで、アラビア語からラテン語に翻訳された、アリストテレスをはじめとするギリシャ文献が北ヨーロッパに到達することにより、ヨーロッパに知的革命が起こったと理解している。それ自体は間違いではないが、近年の思想テクスト研究は、そもそも十二世紀にヨーロッパ世界へもたらされたアリストテレスは、古典古代そのままのテクストではなく、とりわけ自然科学に関わる文献の翻訳などは、アヴェロエスらイスラーム世界におけるその注釈者の解釈を含んだテクストであることを明らかとしている。つまり十二世紀ルネサンスは、古典語原典に忠実であろうとするイタリア・ルネサンスとは異なり、イスラーム的アリストテレスという文化遺産を自らのものとしたことになる。[*35]

そうであるとするならば、十二世紀ルネサンスは、先ほど述べた「地理上の発見」とも「他者」問題とも深く関わる問題であり、単なる文化史上の一挿話ではなく、十二世紀の地中海世界、場合によってはユーラシア西方へと広がる問題系でもある。科学史家である伊東俊太郎やチャールズ・バーネットが提供する古典古代の翻訳文献の移動をめぐる見取り図に接する私たちは、十二世紀ルネサンス論を単純にヨーロッパ内の問題とすることに躊躇せざるをえない。[*36]

おわりに

以上のような研究潮流の変化のなかで『十二世紀宗教改革』を読みなおした場合、私たちは何を提起することができるのだろうか。たとえば、本書では十二世紀の修道士は、グレゴリウス改革前の修道士、とりわけ十世紀頃の修道院改革運動に携わった修道士たちと比較した場合に何が違うのだろうか。たとえば、辺境社会における修道院の役割は本書で扱った「中核」の修道院と何が重なり、何が異なるのだろうか。たとえば、「他者」に対峙する修道士はどのような記述を文献に残しているのだろうか。たとえば、十二世紀ルネサンスの翻訳活動に修道士はどのように関わっているのだろうか。このように本書で論じることのなかった十二世紀固有の問題が、次々と提起可能である。十二世紀におけるヨーロッパ「中核」の修道士の関心の中心に『ベネディクトゥス戒律』があることを余すことなく論じた『十二世紀宗教改革』の価値は今後とも不変であり、スーザン・レイノルズやロバート・ムーアらの著作とならび、中世史そして十二世紀研究の新しい古典として読み継がれていくだろう。[*37] そのような古典は、古典として当該分野の座右の書となると同時に、本書の記述を出発点として、修道制や修道士の関わりという観点から近年の研究動向に即した読み直しがはかられ、その結果として十二世紀変革論へと寄与することができるのではないだろうか。

訳者解説

＊1　三人のうち、ノウルズとルクレールの著書は翻訳されている。M・D・ノウルズ他著、上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史3　中世キリスト教の成立』平凡社、一九九六年。ジャン・ルクレール著、上智大学中世思想研究所監訳『キリスト教神秘主義思想史2　中世の霊性』平凡社、一九九七年。ジャン・ルクレール著、神崎忠昭・矢内義顕訳『修道院文化入門――学問への愛と神への希求』知泉書店、二〇〇四年。

＊2　Charles H. Haskins, *The Twelfth Century Renaissance*, Cambridge, Mass: Harvard UP, 1927〔野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五年。別宮貞徳・朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』みすず書房、一九八九年〕.

＊3　Leidulf Melve, "'The revolt of the medievalists'. Directions in recent research on the twelfth-century renaissance", *Journal of medieval history* 32 (2006), pp. 231–52.

＊4　Jacob Burckhardt, *Die Kunst der Renaissance in Italien*, hrsg. Maurizio Ghelardi, Susanne Müller & Max Seidel (Jacob Burckhardt Werke: kritische Gesamtausgabe Bd. 5) München: C.H. Beck, 2006〔新井靖一訳『イタリア・ルネサンスの文化』筑摩書房、二〇〇七年。柴田治三郎訳『イタリア・ルネサンスの文化』第二巻、中公クラシックス、二〇〇二年〕. 一冊の書物として完結したイタリア・ルネサンス論として未だこの古典を超えるものはないとしばしば言われる。しかしルネサンス叙述の革新を目指す概論はいくつも翻訳されている。近年の成果として、社会学的データによる、ピーター・バーク著、森田義之・柴野均訳『イタリア・ルネサンスの文化と社会〔新版〕』岩波書店、二〇〇〇年、イタリアにはじまるルネサンスの普及をヨーロッパ規模で追跡したウィリアム・J・バウズマ著、澤井繁男訳『ルネサンスの秋――一五五〇―一六四〇』みすず書房、二〇一二年、東西世界の物質的・精神的交渉のなかでルネサンスの文化を捉え直すジェリー・ブロトン著、高山芳樹訳『はじめてわかるルネサンス』ちくま学芸文庫、二〇一三年をあげておきたい。

＊5　中世ルネサンスをめぐるヒストリオグラフィとして、Wallace K. Ferguson, *The Renaissance in Historical Thought: Five Centuries of Interpretation*, Toronto: Uniersity of Toronto Press, 2006 (1948).

＊6　Ferguson (2006), pp. 329–385.

＊7　Robert L. Benson & Giles Constable (eds.), *Renaissance and Renewal in the Twelfth Century*, Cambridge, Mass: Harvard UP 1982.

＊8　小澤実「西洋中世の民衆宗教運動――グルントマン以降」小澤実編『物語るロマネスク霊性――池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』（名古屋大学出版会、二〇〇七年）書評集』、『クリオ』二二号別冊、クリオの会、二〇〇八年、九―一七頁。アメリカにおける中世宗教史研究の歩みは、コンスタブルが自らの経験を踏まえながらまとめている。Constable, "From church

history to religious culture: the study of medieval religious life and spirituality" Miri Rubin (ed.), *European Religious Cultures. Essays Offered to Christopher Brooke on the Occasion of his Eightieth Birthday*, London 2008, pp. 3–16. また、近年のヒストリオグラフィにおける「教会史」から「(諸) 宗教史」への関心の転換を整理するのは、Christine Caldwel Ames, "Medieval religious, religions, religion" *History Compass* 10 (2012), pp. 334–352.

＊9　Edward Peters, "Henry Charles Lea (1825–1909)", Helen Damico & Joseph B. Zavaldi (eds.), *Medieval Scholarship. Biographical Studies on the Formation of a Discipline 1: History*, New York: Garland, 1995, pp. 89–99. なおジャイルズ・コンスタブルがハーヴァード大学で保持していたポストはヘンリ・チャールズ・リー記念教授 (Henry Charles Lea Professorship) である。

＊10　読み解き方に注意が必要であるが、時代の空気を伝える「証言」として、ノーマン・キャンター著、朝倉文市・横山竹己・梅津教孝訳『中世の発見――偉大な歴史家たちの伝記』法政大学出版局、二〇〇七年、第六章。

＊11　Constable (2008), p. 4.

＊12　堀米庸三・木村尚三郎編『西欧精神の探究――革新の十二世紀』日本放送出版協会、上下巻、二〇〇一年〔一九七六年〕。

＊13　論文は多数にのぼるが、代表的な著作のみを挙げておく。池上俊一『ロマネスク世界論』名古屋大学出版会、一九九九年。池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』名古屋大学出版会、二〇〇七年。杉崎泰一郎『十二世紀の修道院と社会』原書房、二〇〇五年。甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神――ソールズベリのジョンの思想構造』知泉書館、二〇〇九年。小田内隆『異端者たちの中世ヨーロッパ』日本放送出版協会、二〇一〇年。

＊14　近年の宗教改革研究は、すでにこのようなプロテスタント勝利史観を脱している。理由の一つは十四世紀から十七世紀までを一つの歴史動態で捉えようとする見方が強くなってきていること、もう一つはカトリックの動きも含めてヨーロッパ全体の宗教変動を捉えようとする見方が強くなってきていることである。K・G・アッポルド著、徳善義和訳『宗教改革小史』教文館、二〇一二年。踊共二「宗派化論――ヨーロッパ近世史のキーコンセプト」『武蔵大学人文会雑誌』四二号（二〇一一年）、一〇九―一五八頁。

＊15　Gerd Tellenbach, *Church, State and Christian Society at the Time of the Investiture Contest*, translated by Ralph F. Bennett, Toronto: Tronto UP, 1991.

＊16　David Luscomb & Jonathan Riley-Smith (eds.), *The New Cambridge Medieval History, vol.4: c.1024-c.1198*, 2 vols. Cambridge: Cambridge UP, 2004. この巻にはコンスタブルも「信仰共同体、一〇二四―一二一五」というタイトルで寄稿しているが、基本的に本書の事例と重なっている。Giles Constable, "Religious communities, 1024–1215", Luscomb & Riley-Smith (2004), Part 1, pp.335–367.

＊17　関口武彦『クリュニー修道制の研究』南窓社、二〇〇五年。関口武彦『教皇改革の研究』南窓社、二〇一三年。

＊18 Thomas F.X. Noble & John van Engen (eds.), *European Transformations. The Long Twelfth Century*, Notre Dam, IN: University of Notre Dame Press 2012; John D. Cotts, *Europe's Long Twelfth Century. Order, Anxiety, and Adaptation, 1095–1229*, Basingstoke: Palgrave Macmillan 2013. 前者はベンソンとコンスタブル編の論集以来の成果を総括する目的を掲げ、北欧や東欧も含めた、十二世紀における地域ごとの特色、そして、ベンソンとコンスタブル編の論集ではさほど触れられることはなかったが、現在の関心を反映したイスラーム、ユダヤ人、女性などをテーマとした各論者が寄稿している。後者は、政治秩序、社会経済、宗教、知的枠組み、十字軍とキリスト教世界理念というオーソドックスな観点から、近年の研究成果を簡潔にまとめた小著である。

＊19 ロバート・バートレット著、伊藤誓・磯山甚一訳『ヨーロッパの形成――九五〇―一三五〇年における征服、植民、文化変容』法政大学出版局、二〇〇三年。

＊20 ジョセフ・ストレイヤー『近代国家の起源』岩波新書、一九七五年。

＊21 Christopher Tyerman, *God's War. A New History of the Crusades*, London: Penguin Books 2006, pp.650f. A・ジョティシュキー著、森田安一訳『十字軍の歴史』刀水書房、二〇一三年、第八章を参照。

＊22 北方十字軍について、Eric Christiansen, *The Northern Crusades*, New edition, Harmondsworth: Penguin Books 1997 を参照。より専門的な研究としては、Alan V. Murray (ed.), *Crusade and Conversion on the Baltic Frontier 1150–1500*, Aldershot: Ashgate 1998; Alan V. Murray (ed.), *The Clash of Cultures on the Medieval Baltic Frontier*, Ashgate 2009 などがある。

＊23 R. R. Daies, *Domination and Conquest. The Experience of Ireland, Scotland and Wales 1100–1300*, Cambridge: Cambridge UP, 1990.

＊24 高山博『神秘の中世王国――ヨーロッパ・ビザンツ・イスラム文化の十字路』東京大学出版会、一九九五年。山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』白水社、二〇〇九年。なおノルマン研究の古典は、Charles H. Haskins, *The Normans in European History*, New York: W. W. Norton, 1966 (1915).

＊25 Peter Jackson, "Christians, barbarians and monsters: the European discovery of the world beyond Islam", Peter Linehan & Janet L. Jackson (eds.), *The Medieval World*, London: Routledge, 2001, pp. 93–110.

＊26 池上俊一訳『東方の驚異』講談社、二〇〇九年。

＊27 モンゴル帝国との接触以降の研究状況は、小澤実「モンゴル帝国期以降のユーラシア世界とヨーロッパとの交渉」『東洋史研究』七一巻三号（二〇一二年）、一八一―一九六頁を参照。

＊28 ジャック・ルゴフ著、池上俊一訳『中世の夢』名古屋大学出版会、一九九二年、特に第一論文。また、池上俊一『中世幻想世界への招待』河出文庫、二〇一二年、特に第四章を参照。

＊29 Robert I. Moore, *The Formation of A Persecuting Society. Authority and Deviance in Western Europe 950–1250*, 2 ed. Oxford: Blackwell, 2007; Dominique Iogna-Prat, *Ordonner et exclure: Cluny et la société chrétienne face à l'hérésie, au judaïsme et à l'islam, 1000–1150*, Paris: Aubier, 1998.

＊30 Anna Sapier Abulafia, *Christian-Jewish Relations 1000–1300. Jews in the Service of Medieval Christendom*, Harlow: Longman, 2011.

＊31 リチャード・サザーン著、鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラム世界』岩波書店、一九八〇年。モンゴメリ・ワット著、三木亘訳『地中海世界のイスラム――ヨーロッパとの出会い』筑摩書房、二〇〇八年［一九八四年］。最新の関係史として、J. Tolan, G. Veinstein, & H. Laurens, *Europe and the Islamic World. A History*, Princeton, NJ: Princeton UP, 2012 がある。両者の関係を扱った史料叢覧として、D. Thomas (ed.), *Christian-Muslim Relations. A Bibliographical History*. 4vols. Leiden: Brill, 2009–2012 がある。

＊32 Alex Metcalfe, *Muslims and Christians in Norman Sicily: Arabic-Speakers and the End of Islam*, London: Routledge, 2002. 南イタリアのルチェーラにおけるムスリム共同体の分析として、Julie Taylor, *Muslims in Medieval Italy: The Colony at Lucera*, New York 2005; Sidney H. Griffith, *The Church in the Shadow of the mosque. Christians and Muslims in the World of Islam*, Princeton, NJ: Princeton UP 2008; *The Bible in Arabic. The Sctiptures of the "People of the Book" in the Language of Islam*, New Jersey 2013; Thomas Burman, *Reading the Qu'ran in Latin Christendom, 1130–1560*, Philadelphia, PA: U of Penn Press, 2007 などがある。アラブ世界のキリスト教徒の活動に関する通史的見取り図として、サミール・ハリル・サミール著、戸田聡訳「アラブ世界におけるキリスト教徒の文化的役割」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』六（二〇〇八年）、七九―一一〇頁を参照。

＊33 Sylvain Gouguenheim, *Aristote au Mont Saint-Michel. Les racines grecques de l'Europe chrétienne*, Paris: Seuil, 2008.

＊34 グゲナムの議論に対する批判として、Philippe Büttgen et al. (ed.), *Les Grecs, les Arabes et nous. Enquête sur l'Islamophobie savante*, Paris: Fayard, 2009; Max Lejbowicz (ed.), *L'islam médiéval en terres chrétiennes: Science et idéologie*, Lille: Presses Universitaires du Septentrion, 2009 などがある。

＊35 イスラーム世界における思想テクストについて、A・S・マクグレイド著、川添信介監訳『中世の哲学』京都大学学術出版会、二〇一二年、第四章を参照。ここで指摘されているように、イスラーム世界の思想家には非イスラーム教徒（キリスト教徒、サービア教徒、マズダク教徒、ゾロアスター教徒、ユダヤ教徒など）がいたことを喚起すべきである。

＊36 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫、二〇〇六年。Charles Burnett, "Translation and transmission of Greek and Islamic science to Latin Christendom", David C. Lindberg & Michael H. Shank (eds.), *The Cambridge History of Science, vol.2: Medieval Science*, Cambridge: Cambridge UP, 2013, pp. 341–364. さらに Charles Burnett, "The twelfth-century renaissance", Lindberg & Shank (2013), pp. 365–384.

＊37 Susan Reynolds, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900–1300*, 2 ed. Oxford: Oxford UP, 1997; Robert I. Moore, *The First European Revolution c.970–1215*, Oxford: Blackwel, 2000.